

行司と草履

根 間 弘 海

1. はじめに¹⁾

昭和35年1月の審判規定の「行司」の項、第20条によると（昭和30年5月施行）、行司はその階級に応じて、次のように、色が決まっている。

立行司	木村庄之助	紺紫
	式守伊之助	紫白
三役行司		朱
幕内行司		紅白
十枚目行司		青白
幕下二段目以下		黒または青

使用すべき色は決めてあるが、履物や他の持ち物については何も述べていない。しかし、実際には、次のような区別がある。

立行司	庄之助	草履，短刀，足袋，印籠
	伊之助	草履，短刀，足袋，印籠
三役行司		草履，足袋，印籠
幕内行司		足袋
十枚目行司		足袋
幕下二段目以下		素足

草履に関して言えば、三役以上の行司だけに許されている。三役は立行司と同じように横綱土俵入を引く可能性があるため、草履を特別に許されている。しかし、そのように決まったのは、昭和35年1月である。それ以前は、草履を履けたのは「立行司」や「副立行司」に加え、緋房の行司の中で特別に許されたものだけだった²⁾。つまり、緋房行司だからと言って、どの行司でも草履を履けたわけではない。

現在では草履は三役以上であれば誰にでも許される特権であるが、昭和35年以前は、緋房行司では一部の者だけに許される特権だった。その特権は、端的には、横綱土俵入を引くことができることである。草履の免許は吉田司家から授与されることになっていた。さらに、房の色も紅白以上であれば、吉田司家の免許を必要としていた。このように、行司の世界では、草履にしても房の色にしてもそれを許されるのは大変名誉なことだった。

本稿では、特に明治中期に活躍した緋房以上の行司に限定し、緋房と草履が授与された年月を調べ、その授与は同時ではなく、別々になされていることを指摘する。さらに、江戸時代のいつごろから、草履が特権的な履物になかったかを調べ、木村庄之助は天明8年から、式守伊之助は文政11年から、それぞれ草履免許を受けるようになったことも指摘する。すなわち、木村庄之助にしても式守伊之助にしても勸進相撲の初期の頃から草履を特権として履いていたのではなく、ある時点から草履が特権的な履物になったのである。

明治初期の行司の緋房や草履に関しては、明治15年7月に相撲協会が吉田司家に出した御請書を特に参考にしている³⁾。この文書には当時の上位行司の緋房や草履のことが記されていることから、貴重な資料となる。しかし、緋房や草履を「いつ」授与したかに関しては、この文書ではわからない。わかるのは、当時、どの行司が草履を履き、房がどの色であったかという事実だけである。この御請書は明治15年7月に出されているが、というわけか、他の資料と必ずしも一致していない場合がある。どのよう

な違いがあるかも知りたい。

明治10年頃から明治15年頃までは、行司の草履や房の色を相撲協会が独自に許可した可能性がある。その間、吉田司家の主人である吉田追風（すなわち吉田善左衛門）は西南の役に参加した責任を問われ、房紐や草履の免許授与を含め、行司に関わる業務から遠ざかっていた⁴⁾。相撲協会は許可した草履や房の色を記し、吉田司家に報告している。吉田司家はそれを追認したため、それに対し相撲協会は御請書として吉田司家に提出している。御請書が免許の代わりになっているのか、あとで免許状が出されたのかは明らかでない。

2. 正徳時代の草履

『相撲家伝鈔』（正徳4年（1714））に「草履の事」の項があり、次のように述べている。

「草履は田舎体にては冬にて用いる事もあり。御前相撲などは不礼なり。夏は素足、冬草履を履かず。足袋ばかりにて致すべし。惣じて草履はくこと不作法なり。キヤハンハ用いるべからず。牡丹などに緞子あや、いずれも見合用いるべし。」

この記述から判断すると、草履は寒さしのぎのためであり、まったく特権的な履物にはなっていない。草履を履いたとしても、おそらく冬だけである。冬でも、草履ではなく、足袋だけに留めたほうがよいとしている。草履を履くときは、素足ではなく、同時に足袋も履いている。御前相撲では草履は礼儀にかなわないので、履かないほうがよいとしている。足袋は許されていたかもしれない。いずれにしても、正徳4年頃は、御前相撲はもちろん、勧進相撲でも草履を履くことは無作法である。

正徳以前、草履がどのような扱いだったかはまったくわからない。が、

絵図を見る限り、行司はほとんど素足か足袋である。土俵が冷たいときに、寒さしのぎで足袋を履いたかもしれない。しかし、草履は禁止されていなかったらしい。というのは、草履を履いている絵図を見ることができるからである。たとえば、少なくとも次の2つの絵図では行司が草履を履いている。

- (1) 「元禄四十八手絵巻」, 堺市博物館製作『相撲の歴史』(p.24)
- (2) 四角土俵を描いた図, 堺市博物館製作『相撲の歴史』(p.26)⁵⁾

この絵図で見る限り、元禄時代でも、草履を履くことがあったことになる。しかし、多くの絵図では、行司は草履を履いていない。このことは草履を履くことに特別な特権がなかったことを意味する。

勸進相撲や草相撲では、特に寒い冬では、草履を履くことがあったかもしれないが、御前相撲では無作法としてみなされていたようだ。正徳以前では勸進相撲であっても草履を履くことは慣例化していないと言ってよいであろう。すなわち、勸進相撲で草履を履くことが特別な意味を持つようになったのは、少なくとも正徳以降である。文字資料や絵図で見る限り、正徳から天明7年までは、行司の草履が免許制になったことを示唆するものは見当たらない。しかし、後の文献によると、行司の家元である追風は元禄よりずっと以前に草履を許されている⁶⁾。それは免許ではなく、追風に授与された特権である。

3. 木村庄之助と草履

勸進相撲で行司の中で草履を履くのを特権として許可されたのは、5代木村庄之助が最初である⁷⁾。文政10年(1827)11月、『相撲行司家伝』に16代吉田追風が5代木村庄之助に次のような免許を出したことが書いてある。

免許状

無事之唐団扇並紅緒，方屋之内，上草履之事免之候，可有受用候，
仍免状如件

寛延二年巳八月

本朝相撲司御行司

19代吉田追風 ㊦

江府

木村庄之助殿

この『相撲行司家伝』は⁹⁾、木村庄之助の「先祖書」と呼ぶこともある。文政10年までの歴代の木村庄之助のことが記述されているからである。これは幕府から相撲会所に行司の由来などについて問われ、9代木村庄之助が提出用として文書にまとめたものである。これによると、5代木村庄之助がはじめて、寛延2年（1742）8月に草履を履くことが許されている。初代から4代目までの木村庄之助が草履を履いていたかどうかは、『相撲行司家伝』には何も述べていない。

寛延2年8月に出された免許状では、5代木村庄之助に草履を許しているが、この文言に関しては問題がまったくないわけではない。免許状では、緋房と草履を両方とも許しているが、実は、緋房だけだった可能性がある。つまり、草履の使用は9代木村庄之助が、7代木村庄之助の免許状に倣って、草履の文言を後で追加した可能性がある。そう考えたい証拠が少なくとも二つある。

その一つが、寛政元年11月26日に勧進元3名が連名で寺社奉行所へ提出した文書である。その中に「差し上げ申す一礼の事」として、次のような記述がある。

「今般吉田善左衛門追風殿より、東西谷風，小野川へ横綱伝授被致候，先年木村庄之助場所上草履相用い候儀 先日善左衛門殿より免許

有之、その節場所にて披露仕候例も御座候につき、この度も同様披露仕度旨、牧野備前守様へも願申上候処、苦しかるまじき仰せ渡され、有難く畏まり奉り候、(中略)、之に依って一札申上候」(酒井著『日本相撲史(上)』(p.166)／『相撲講本』(p.593))

寛政元年の木村庄之助は7代目で、明和8年(1771)3月に木村庄之助を襲名している。この記事によると、襲名後9年ほどして草履の許可を受けているが、それまでこの木村庄之助は草履を履いていないことになる。

それでは、6代木村庄之助は草履を許されていただろうか。この木村庄之助にも5代木村庄之助と同じ免許状が出されているが、『相撲行司家伝』によると、その免許状は焼失してしまい、残っていない。したがって、同じ免許状であったなら、草履も許されていることになる。しかし、この草履が実際に許可されていたかとなると、5代目と同様に、疑わしい。というのは、7代目の草履に関し、当時の相撲会所が特別にその使用を報告しているからである。

二つ目は、天明7年以前の錦絵を見るかぎり、木村庄之助はすべて素足で取組を裁いている。たとえば、次のような天明年間に描かれた錦絵では、7代木村庄之助は素足である。

- (1) 谷風と小野川の立ち合いの図、堺市博物館編『相撲の歴史』(p.35)
- (2) 東西土俵入の図(谷風と小野川)、堺市博物館編『相撲の歴史』(p.35)
- (3) 江戸勸進大相撲浮世絵之図、谷風・小野川取組、堺市博物館編『相撲の歴史』(p.36)

天明以前の明和年間に描かれた絵図では、行司は素足のままである。したがって、当時の絵では木村庄之助の草履を確認できない。錦絵が現れて間もない頃で、相撲を描いたものはあまりない。天明7年以前の絵図では、7代木村庄之助も含め、6代木村庄之助も草履を履いた姿では描かれてい

ない⁹⁾。したがって、6代目はもちろん、7代木村庄之助も天明7年までは草履を履いていなかったと断言して差し支えない。

7代木村庄之助は寛政元年11月に寺社奉行所に提出した文書の前年、錦絵で草履を履いていたことが確認できる。その絵は天明8年4月春場所の幕内土俵入を描いたものである。これは、たとえば、池田著『相撲百年の歴史』(p.10)に掲載されている。この錦絵では行司の名前は書いてないが、裁いている行司は木村庄之助に違いない。

それでは、寛延2年8月、5代木村庄之助に授与された免許状はどう解釈すればよいだろうか。実は、この免許状の文面は寛延2年8月の免許状をそのまま映したものではないということである。すなわち、その免許状には草履のことは何も触れていなかったに違いない。天明8年以降、木村庄之助に草履を許すことが慣例化していたために、9代木村庄之助は5代木村庄之助の場合も草履を履いていたと勘違いし、それをまます書き加えたのである。原本の免許状があったなら、「草履」の文言を新たに追加したことになる¹⁰⁾。もしかすると、5代木村庄之助の免許状は9代木村庄之助の手元にはなかったかもしれない。

寛政元年11月に寺社奉行所に提出した文書以降、代々の木村庄之助は草履を履いている。寛政年間の錦絵だけを見ても、これは、たとえば、次の錦絵で確認できる。

- (1) 横綱授与の図、寛政元年(1789)、池田著『相撲百年の歴史』(pp.50-51)

谷風と小野川に横綱を伝授しているが、行司は草履を履いている。

- (2) 雷電と陣幕の取組、寛政3年(1801)、『相撲浮世絵』(p.70)
庄之助の左足には草履がある。

- (3) 小野川と雷電の取組、寛政元年から3年(1789～1801)、『江戸相撲錦絵』(p.68)

これらの錦絵は年代に3年ほどの幅があるが、すべて寛政元年以降

のものである。どの絵でも行司は草履を履いている。

寛政元年の錦絵は少ないが、寛政3年以降に描かれた錦絵はかなりある。寛政以降、木村庄之助が草履を履くのは当たり前になっている。

4. 寛政の上覧相撲

寛政3年に上覧相撲が行われているが、そのとき、木村庄之助が草履を履いていたかどうかは、必ずしも定かでない¹¹⁾。少なくとも、文字資料では確認できない。上覧相撲の様子を記した文献はいくつかあるが、その中では吉田追風の草履しか確認できない¹²⁾。

たとえば、『相撲隠雲解』（式守蝸牛著、寛政5年）には、吉田追風について次のような記述がある¹³⁾。

「谷風、小野川取組の節、古例によって、古例によって、往古、追風、禁裏より賜わりたる紫の打ち紐つけたる獅子王の団扇を持ち、風折り烏帽子、狩衣、四幅の袴を着用の上、草履御免にて相勤め候」
(p.117)

ここにあるように、吉田追風の草履御免についてはそれを強調している記述がたくさんあるが、他の行司がどのような履物を履いていたかに関してはまったく記述されていない。履物に注目し、それを丹念に調べてみたが、まったく手がかりは得られなかった。すなわち、素足なのか、足袋だけなのか、それとも草履を履いていたのか、上覧相撲を記した文字資料では判断できない。しかし、絵図や他の資料から、判断できないこともない。それについて、簡単に触れておきたい。

上覧相撲の木村庄之助は7代目だが、次のような間接的資料から推測すると、この木村庄之助は草履を履いていた可能性が高い¹⁴⁾。

- (1) 寛政元年11月に寺社奉行に提出した文書では草履が許可されている。
- (2) 寛政元年に谷風と小野川に横綱を伝授した様子を描いた錦絵があるが¹⁵⁾、土俵上で行司は草履を履いている。
- (3) 寛政2年11月場所の小野川と雷電の取組を描いた錦絵が『相撲錦絵発見記』（ジョージ石黒著、p.84）にあるが、それを裁いて行司は草履を履いている。その行司は間違いなく木村庄之助である。
- (4) 寛政3年4月の谷風と小野川の引き分け相撲を描いたという錦絵が *Sumo and the Woodblock Print Masters* (p.27) にあるが、それにも木村庄之助は草履を履いている。上覧相撲が行われる2ヶ月前まで草履を履いていることから、木村庄之助は上覧相撲でも草履を履いていた可能性がきわめて高い。

上記の錦絵はすべて、勧進相撲を描いたものである。上覧相撲を描いた錦絵もある。それは上覧相撲の雷電と陣幕の取組を描いた錦絵である¹⁶⁾。その錦絵で行司は草履を履いている。上覧相撲を絵師が直接見ていない可能性があるが、絵師は相撲関係者から話を聞いて描いているはずだ。実際は草履を履いていなかったのに、錦絵では草履を描くということはないはずである。そう解釈するのが自然である。

しかし、一つの可能性を否定することもできない。すなわち、木村庄之助は上覧相撲のため草履御免を許されていないかもしれない。追風の草履御免は特権のように記されているが、木村庄之助の草履についてはまったく言及されていないからである。上覧相撲に式守伊之助とした勤めた式守蝸牛は『相撲隠雲解』（寛政5年）をその2年後に著しているが、その中にも木村庄之助の草履についてはまったく触れていない。さらに、木村庄之助を描いたと思われる絵図も二つあるが、やはり素足である。

一つの絵図では谷風の土俵入が描かれているが、中腰になっている行司は素足である。横綱土俵入を引く行司は木村庄之助か式守伊之助であるは

ずである¹⁷⁾。もしこの行司が木村庄之助ならば、土俵上で草履を履いていないことになる¹⁸⁾。もう一つの絵図では行司が横綱を先導しているが、やはり素足である。この行司はどの位階か判別できないが、横綱を引くくらいだから、木村庄之助か式守伊之助であろう。もしその行司が著者である式守伊之助自身であれば、草履を履くことは特権なので、必ずそのことを記述していたに違いない。その行司が式守伊之助でなければ、木村庄之助ということになるが、その木村庄之助が草履を履いていないのである。

私は、どちらかと言えば、木村庄之助が草履を履いていたことに軍配をあげるが、文字資料で確認できないので、その判断は必ずしも正しくないかもしれない。文字資料で確認できないために、そのような推論しか書けないが、実は、私が資料を見落としている可能性もある¹⁹⁾。寛政元年11月の文書には草履を履くことが記されているのに、寛政3年の6月の上覧相撲の模様を記述した写本などでは木村庄之助の草履について何の記述もないのである。

追風が草履を履いているのは、たとえば、徳川家斉公上覧相撲絵巻（寛政3年（1791））や『相撲の歴史』（堺市博物館編，p. 39）でも確認できる²⁰⁾。谷風と小野川の取組を裁いた行司は追風であるし、勝ち力士に弓を授けたのも追風である。現在であれば、結びの一番を裁くのは木村庄之助だが、上覧相撲で結びの一番を裁いたのは、追風である²¹⁾。

5. 式守伊之助と草履

初代式守伊之助は明和4年3月場所から寛政5年3月場所まで勤めているが、その間、草履を履いていたことを確認できる文献はない²²⁾。おそらく、履いていなかったに違いない。したがって、寛政3年の上覧相撲でも草履は履いていないはずだ²³⁾。

『相撲隠雲解』（式守蝸牛著，寛政5年）は初代式守伊之助の著書だが、

式守伊之助は自分が草履を履いていたことを述べていない。もし履いていたなら、それを必ず書いていたはずだ。寛政5年当時、草履を履くことは、行司の特権だったからである。実際、『相撲隠雲解』には行司が横綱を引いている図があるが、行司は素足である。その行司が木村庄之助なのか式守伊之助なのか判断できないが、そのうちの一人であろう²⁴⁾。いずれにしても、寛政3年当時、式守伊之助は草履を履いていないことだけは確かだ。

式守伊之助の草履許可を最初に確認できる文字資料は、『相撲金剛伝(下)』(蓬萊山人著、文政11年(1828))である。その中に、次のような記述がある。この式守伊之助は、3代目である。

「故式守伊之助門人 卯之助改
天明4子年春相撲初めて出勤 卯之助
文政3辰年改名
文政11子年上履 免許」

すなわち、式守伊之助は文政11年(1828)に初めて草履免許を受けている。この式守伊之助は文政3年3月に襲名し、約9年後に草履の免許を授与されているが、その間、草履を履いていなかったかどうか、必ずしもはっきりしない。少なくとも文字資料では確認できなかった。正式な草履免許はときどき使用許可の年月より後で出ることもある。いずれにしても、正式に吉田追風から草履免許が授与されたのは、文政11年である。

2代式守伊之助は寛政5年10月から寛政11年11月までと文化11年4月から文政2年11月までの2回勤めているが²⁵⁾、いずれの間でも草履を許されたことを示す文献はない。式守伊之助は安永以降、木村庄之助の次席行司なので、式守伊之助を襲名すると同時に草履の許可も授与されたと思いがちだが、実際はそうでもない。木村庄之助と式守伊之助との間には大きな差があったのである²⁶⁾。

幕末になると、木村庄之助と式守伊之助は二人とも、基本的に、緋房で、

かつ草履も許可されている。江戸時代は「紫」は禁色なので²⁷⁾、最高位の木村庄之助であっても軍配房は「緋色」である。この房の色は、基本的には、明治23年代に15代木村庄之助に「紫房」が許可されるまで続いていたと言ってもよい²⁸⁾。

しかし、江戸時代に紫房がまったく許可されなかったかという点、必ずしもそうではない。例外は少なくとも一人確認できる²⁹⁾。その行司は、『相撲金剛伝（下）』（文政11年）で確認できる。9代木村庄之助は文政7年10月から天保5年10月まで勤めているが、文政11年には「紫紐」の上草履が吉田司家から授与されている。しかし、この紫紐は純粹の「総紫」ではなく、おそらく白糸が何本か交じったものに違いない。いずれにしても、江戸時代でも「紫房」が9代木村庄之助に授与されていることは文献で確認できる³⁰⁾。これは例外かもしれないが、これまで見落とされている事実である。9代木村庄助の「紫房」がもっと脚光を浴びていたなら、「紫房」に関する見方は少し変わっていたかもしれない。

『読売新聞』（M23.1.19）によると、明治23年当時、15代木村庄之助は「紫房」を使用しているが、この「紫」はどうやら純粹の「総紫」ではなかったらしい。しかし、文献ではほとんどの場合、「紫」として記述されている。『読売新聞』（M30.2.10）によると、木村庄之助の紫房には2、3本の白糸が交じっている。明治23年当時でさえ、純粹の「総紫」を授与するのを吉田司家は避けている。幕末の9代木村庄之助の「紫紐」に2、3本の白糸が混じっていたに違いないと推測したのは、明治23年当時でさえ純粹の「総紫」を授与していないからである。

6. 明治15年の御請書の緋房行司と草履

荒木著『相撲道と吉田司家』（昭和34年、p.126）によると、明治15年6月13日、吉田司家が「故実相伝又は免許許可条目」として相撲協会に文書

を提出している³¹⁾。その中に吉田司家の許可を必要とする項目が記されている³²⁾。

免許スヘキモノ左ノ如シ

第一 黒無地団扇紐紅熨斗目麻上下

第二 団扇紐紫白色打交³³⁾

第三 上草履

第四 団扇紐紅白打交

第五 上足袋

第六 横綱³⁴⁾

第七 持太刀

ここに記載されている項目は、たぶん、江戸時代から受け継がれていたはずだが、時代の変わり目でその遵守が混乱してきたため、文書の形で契約し直したに違いない。実際、吉田司家の主人善左衛門は西南の役に参加しているため明治10年頃から15年まで行司として積極的な役割を果たしていない³⁵⁾。しかし、明治15年には、吉田追風は東京で相撲協会の代表者たちと会い、相撲司家の権威を取り戻す努力をしている³⁶⁾。その一つが、上記の契約である。

これは、明治15年7月、相撲協会が吉田司家に願い書を出し、その許可を吉田司家が出し、それについて協会が「御請書」として吉田司家に提出したものである。これも荒木著『相撲道と吉田司家』(pp. 126-127)に掲載されている。(この御請書は縦書きなので、「右同」は「上と同じ」を意味する。)

御請書

紫白打交紐

熨斗目

木村庄之助³⁷⁾

麻上下

方屋上草履

紅紐

熨斗目

式守伊之助

麻上下

方屋上草履

右同

木村庄三郎³⁸⁾

紅紐

式守与太夫

方屋上草履

木村庄五郎

右同

木村誠道

右同

木村庄次郎³⁹⁾

紅白打交紐

木村多司馬

方屋上足袋

右同

木村喜代治

右同

式守錦太夫

右同

木村嘉太郎

右十一名ノ者共へ前書ノとおり御免許奉願候処、願ノとおり御附与
被成下難有奉頂戴候、依テ御請書差上候以上

明治十五年代七月三日

年寄 伊勢ノ海五太夫 ㊦

取締 大嶽 門左衛門 ㊦

同 中立 庄太郎 ㊦

年寄 根岸 治三郎 ㊦

吉 田 善 門 殿

御請書に記されているように、明治15年7月には上記の行司は房の色や草履に関しそのとおりだったことになる。「方屋上草履」とあれば、それを履くことのできる行司はすでに「緋房」の軍配を使用していたことになる。もちろん、足袋も履いている。緋房の行司でなければ、草履の使用は許されていない。式守与太夫のように、「緋房」だけなら、草履はまだ履けていない可能性が高い。木村多司馬は「紅白」で足袋なので、現在の「幕内格」に相当する。木村喜代治、式守錦太夫、木村嘉太郎は「足袋」なので、おそらく、「十兩格」である⁴⁰⁾。

この御請書で明治15年の行司の緋房や草履は分かるが、それをいつ許されたのかという「授与年月」はわからない。上記の「緋房」以上の行司について他の文献を調べてみると、緋房や草履の免許年月はこの御請書とは必ずしも一致しないのである。むしろ、異なっている場合が多い。これは不思議である。

推測になるが、明治10年頃から明治15年頃までは、相撲協会が吉田司家の許可を受けず、独自に使用許可を出していた可能性がある。吉田善左衛門は当時、西南の役に参加した責任を取られ、行司の免許どころか行司に関わる業務から遠ざかっていた。しかし、その間も東京相撲は行われており、行司の人事も進めなくてはならない。そのため、相撲協会は独自に房の色や草履の使用を許可した可能性がある⁴¹⁾。その使用は文書で行われたのか、口頭で行われたのかはわからない。もし相撲協会が免許状の形で出していたなら、その免許状がどこかに埋もれている可能性もある。

(1) 木村庄之助

この木村庄之助は4代木村喜代治(弘化3.3～文久2.11)、10代庄太郎(文久3.7～M9.4)となり、14代木村庄之助(M10.1～18.1)と昇進している。

御請書によると、紫白に上草履となっているので⁴²⁾、この14代木村庄之助はすでに草履を履いていたことになる。しかし、御請書にあるように、

14代木村庄之助が紫白房で草履を履いていたことを確認できる資料は他にない。多くの文献では、明治時代に「紫」の免許を初めて授与されたのは、15代木村庄之助となっているが、これがそもそも事実の誤認かもしれない。というのは、14代木村庄之助は、明治15年当時、すでに「紫白」だからである。

この14代木村庄之助は明治10年1月に木村庄之助を襲名しているが、緋房や草履の授与がいつだったのかはわからない。緋房や草履は木村庄之助になる前に授与されている可能性もある。もしそれが明治10年以前であれば、まだ吉田司家は行司の免許を出せる状態にあったので、吉田司家の免許を直に受けた可能性もある。しかし、どちらかの免許が明治10年以降であったなら、相撲協会が独自にその使用を許可したことになる。明治10年1月に木村庄之助を襲名し、紫白と草履のことを御請書にわざわざ記載していることから、この木村庄之助は明治10年には紫白と草履のうち、いずれかを吉田司家から授与されていなかった可能性がある。さらに、明治10年以前に、紫白房を授与されることがあったなら、それは非常に例外的なことなので、吉田司家は簡単に許さなかった可能性がある。この紫白房の使用は、おそらく、相撲協会独自の判断であろう。

なぜ14代木村庄之助の緋房と草履を多くの文献が見落としているかは、謎である。その原因は、おそらく、明治15年に出された御請書の存在が知られていなかったからであろう。相撲協会内部の人たちの中では話題になっていたかもしれないが、相撲や行司のことを書いている部外者はそのことをまったく知らなかったかもしれない。さらに、明治15年当時、行司の房や草履にあまり関心がなく、その事実を記述しなかった可能性もある。明治30年あたりに相撲を詳しく記述した書籍が現れるが、その著者たちも14代木村庄之助の紫白や草履についてまったく知らなかったようだ⁴³⁾。そのために、紫房を許された最初の行司は14代木村庄之助ではなく、15代木村庄之助と記述されている。それが現在でも誤ってそのまま受け継がれて

いる。

明治23年以降、紫房を許可されたのは8代式守伊之助で、明治30年5月場所である。場所中の7日目からその使用が許可されている⁴⁴⁾。これは『角力新報』（第3号、明治30年3月号、p.50）でも確認できる。

14代木村庄之助は明治18年1月の番付に記載されているが、この1月番付は死跡である。というのは、明治17年8月に死亡しているからである。死亡したとき、明治18年1月の番付はまだ発行していなかったはずなので⁴⁵⁾、その番付に死跡扱いで記載してあるのは、特別な計らいがあったに違いない。

ただ一つ、気がかりなことがある。御請書に記載してある房の色や草履の免許が出ていない可能性があることだ。免許が出ていないから、正式なものとしては認められないという立場である。これに対しては、次のように答えるしかないであろう。たとえ免許状が出されていないとしても、それを吉田司家が認めていることは事実だし、他の行司たちもその使用を当然のこととして解釈しているということである。木村庄之助以外にも房の色や草履のことが記載されているが、この行司たちは改めて免許を受けているわけではない。吉田司家は相撲協会の願い書を追認しているのである。

(2) 式守伊之助

御請書の式守伊之助は、おそらく、7代式守伊之助である。というのは、6代式守伊之助は明治13年9月に死亡しているからである。7代式守伊之助は明治16年1月から明治16年5月まで勤めているが、御請書を出した明治15年7月には7代式守伊之助の襲名を予期していたに違いない。

この7代式守伊之助は3代式守鬼一郎である。鬼一郎時代は、最初が安政3年1月から安政3年11月、その次が文久3年7月から明治16年6月である。御請書では緋房と草履の使用が記載されているが、いつの年月にそれが授与されたかはわからない。この3代式守鬼一郎（つまり7代式守伊

之助)が明治15年当時、緋房で上草履だったことは確認できるが、15年以前のいつの時点でその使用許可が下りたかはわからない。また、緋房の授与があったとしても、それと同時に上草履の授与が必ずしもあるわけなので、授与の年月はそれぞれ異なっている可能性もある。しかし、いずれもまだ確認できる資料を持ち合わせていない。

(3) 木村庄三郎

これは4代木村庄三郎(元治1.10～M18.1)で、後の15代木村庄之助(M18.5～M30.5)である。この庄三郎は八五郎から角次郎そして庄三郎と改名している。御請書では、草履だけが記載されている。つまり、明治15年当時、草履の使用を許されている。緋房のことが記載されていないのは、明治15年以前にすでにその使用が許されているからであろう。もしかすると、明治10年以前に、すでに吉田司家の免許を授与されていたかもしれない。緋房の免許がいつ授与されているかを確認する資料は持ち合わせていない。また、明治15年当時、草履の使用が許されているが、それをいつ許されているかもわからない。

この木村庄三郎の草履は、御請書以外にも確認できる資料が少なくとも二つある。一つは、明治17年の『角觥秘事解』(松木著, pp.12-13)である。それには、木村庄三郎が福草履を履けたことが記述されている。もう一つは、明治17年の天覧相撲の錦絵である⁴⁶⁾。明治15年から2年後だが、17年の天覧相撲を描いた錦絵でも、この木村庄三郎は緋房で、草履を履いている。いずれにしても、この木村庄三郎は木村庄之助を襲名する以前に、すでに草履を許されていることになる。しかし、緋房と草履をいつ授与されたかに関しては、それを確認できる文字資料を持ち合わせていない。

御請書には「方屋上草履」、『角觥秘事解』(松木著)には「福草履」とあるが、これは単に言葉の違いなのかどうかははっきりしない。御請書では土俵上で履く草履はすべて「方屋上草履」と記してある⁴⁷⁾。

明治19年の『相撲秘鑑』(塩入編, p. 29)によると、明治19年当時、上草履は木村庄之助と式守伊之助だけに許されているという。

「土俵上、草履を用いることを許されるようになり、熨斗目、麻袴を着用する。すなわち、相撲大関の格なれば、大関の他に行司を勤めず。(中略)行司として大関の格は木村庄之助、式守伊之助の二人のみなれば、(後略)」(p. 29)

明治19年当時は、力士の最高位は「大関」なので、大関の取組を裁くのはその格に相当する木村庄之助と式守伊之助だけである。この両力士は緋房で、草履を履くことが許される。さらに、その代理を勤める行司として「福草履」を許された行司がいる。そのような行司も緋房である。その行司の中で特定の行司だけに草履の使用が許可される。これに関しても、塩入編『相撲秘鑑』(明治19年)に次のように書いてある。

「真紅の紐を用いる行司のみが草履を履く」(p. 30)

『相撲秘鑑』(塩入編, p. 29)述べてあるように、明治19年当時、草履が履けたのは木村庄之助と式守伊之助だけではない。御請書によれば、木村庄三郎、木村庄五郎、木村誠道も草履を履いている。御請書に従えば、『相撲秘鑑』の記述は間違っていることになる。

(4) 式守与太夫

これは3代式守与太夫(M4.3~M17.1)で、後の8代式守伊之助(M17.5~31.1)である。御請書では、「紅紐」の使用が許されている。このことは、明治15年当時、この式守与太夫は緋房行司だったが、草履はまだ履けていないことを意味する⁴⁸⁾。いつ緋房が許されたかはっきりしないが、おそらく明治10年以降であろう。とうのは、10年以前であれば、吉田司家から直にその免許が出ているはずで、わざわざ御請書で追認する必要はな

いからである。番付では明治9年12月に最上段に記載されているが、正式の免許はまだ出ていなかったかもしれない。そのようなことを考慮すると、緋房の使用は明治10年から15年の間に相撲協会から許されたとするのが妥当であろう。

草履免許の授与は、御請書の後であろう。つまり、明治16年以降である。『読売新聞』(M30.12.19)によると、明治29年1月に紫免許を受けている⁴⁹⁾。式守伊之助は明治17年5月だが、式守伊之助を襲名しても房は依然として「緋房」だったことになる。また、式守伊之助を襲名したからといって、直ちに草履を履けたわけでもない。草履免許をいつ授与されたかははっきりしないが、それは間違いなく緋房の時代である。緋房で草履だったが、明治29年に1月に紫房になったことになる。

3代式守与太夫は明治15年以降に草履を許されているはずなので、その授与年月はどこかの資料で確認できるかもしれない。しかし、残念ながら、そのような資料はまだ見ていない。明治17年の天覧相撲を描いた錦絵では、式守与太夫は足袋姿なので、草履は明治17年以降となる。

なお、この3代与太夫は8代式守伊之助となったが、明治30年12月18日に死亡している。したがって、明治31年1月の番付記載は死跡である。

(5) 木村庄五郎

これは3代木村庄五郎(安政7.2~M23.5)で、後の6代木村瀬平(M24.1)である。明治23年5月まで庄五郎を名乗っていたが、その翌年1月に瀬平を名乗っている。非常に話題の多い行司だったらしく、いろいろなエピソードが多く文献で取り上げられている。御請書では「方屋上草履」となっているので、明治15年当時、すでに草履を履くことが許されている。おそらく、明治10年から15年の間で、草履使用の許可が相撲協会から出ていたのであろう⁵⁰⁾。御請書には緋房のことは記載されていないので、これは吉田司家から明治10年以前に許されていた可能性が高い⁵¹⁾。番付の最上

段に記載されたのは、明治14年1月場所である。この記載は房の色と関係ないらしい⁵²⁾。つまり、二段目記載から最上段記載になっても、直ちに房の色が変わるわけではないようだ。

この木村庄五郎の緋房と草履に関しては、御請書とは異なる年月もある。緋房免許に関しては、御請書と異なる年月がいくつかあるので、もう少し吟味しなければならない。たとえば、『角力新報』(第8号、明治31年8月)によると、緋房は明治17年の天覧相撲に際して授与されている。

「5月場所の相撲元である行司木村瀬平が使用している緋房の軍配はさる17年3月10日浜離宮において天覧相撲があったとき、肥後の吉田追風より授与されたものである」(p.57)

この記述にあるように、木村瀬平の緋房が明治17年に授与されたことを確認できる資料（特に免許状）は持ち合わせていない。御請書にあるように、それ以前に緋房使用が協会から許可されていた可能性もある。吉田追風は改めて正式に明治17年に緋房免許を出したかもしれない。その辺はまだ吟味する必要がある。草履免許は緋房免許の後なので、もし緋房免許が明治17年であったならば、草履免許はそれ以降ということになる。すなわち、一度目の草履は明治17年から明治26年の間に授与されたことになるが、それが真実なのかどうか定かでない。御請書が正しければ、明治15年以前だからである。

御請書に記載されているように、草履の使用許可が明治10年から15年の間に与えられたものであれば、吉田司家の免許はないかもしれない。相撲協会が独自に出したものを御請書で追認している可能性が高いからである。草履免許の写しがあれば、この問題は簡単に解決するが、残念ながら、そのような資料をまだ見ていない。木村庄五郎は木村瀬平になったとき、草履を履く権利を剥奪され、後にその権利を再び許されているので、二度目の草履の許可はよく資料で確認できる。しかし、最初の草履許可に関して

は、不思議なことに、確認できるような資料がない⁵³⁾。

明治24年1月、庄五郎は6代木村瀬平に改名し、明治26年1月、行司を辞めて年寄になっている。1年ほど年寄稼業をしていたが、明治28年1月に行司に復帰した。これは『読売新聞』(M29.2.13)でも確認できる。復帰はしたものの、席順は元の位置ではなく、一つ下がって木村誠道の次になった⁵⁴⁾。明治26年に行司を辞めたとき、草履許可も剥奪されたので、行司に復帰したときは草履を履けなかった⁵⁵⁾。しかし、『読売新聞』(M30.2.15)によると、明治29年5月、草履免許を再び授与されている。

『読売新聞』(M32.3.16)には明治32年3月14日に紫房の免許が授与されたと書いてある。これは『報知新聞』(M32.5.18)でも確認できる⁵⁶⁾。『読売』(M34.4.8)によると、実際の授与式は明治34年4月、熊本興行中に行なわれている。すなわち、免許が出てから2年後に授与式を行なっている。ということは、明治17年から明治32年までは緋房だったことになる。

『大相撲人物史』(小島, p.167)には明治31年1月場所、吉田司家から紫房と副草履が許されたとあるが、これは正しくない⁵⁷⁾。というのは、これは単なる噂だけで、実際に免許は出ていないからである。これに関しては、『角力新報』(第8号, p.58)にも詳しい説明がある。紫房の免許が出たのはその翌年の明治32年3月である。

(6) 木村誠道

これは初代木村誠道(M12.1~M20.1, M22.5~30.5)で、後の16代木村庄之助(M31.1~45.1)である。明治15年の御請書には「方屋上草履」とあるので、当時、すでに緋房で草履を履いていることになる。しかし、この緋房と草履に関しては、御請書と異なる記述が多くの文献で見られる。

たとえば、『相撲新書』(上司著, 明治32年, p.88)では、緋房は明治20年となっている。『読売新聞』(M20.1.30)によると、その改名は1月場所四日目(1月29日)である。『読売新聞』(M30.12.18)では、木村誠

道は明治18年に鬼一郎に改名し⁵⁸⁾、緋房を許されたとある。明治17年の天覧相撲を描いた錦絵では、木村誠道は緋房で描かれているので、明治18年や20年に緋房が許されたとするのは間違いであろう。明治16年から17年の間で、緋房の免許が授与されたと解釈することも可能だが、御請書にあるとおり、明治15年以前から緋房だったと解釈したほうが妥当であろう。緋房でもないのに、明治15年、相撲協会が「方屋上草履」を申請するはずがないからである⁵⁹⁾。

草履の許可を受けたのは、『読売新聞』(M30.12.18)によると、明治28年5月である⁶⁰⁾。また『相撲新書』(上司著, p.88)によると、明治29年3月である⁶¹⁾。御請書が正しいとすれば、この二つはいずれも正しくない。御請書によると、草履の使用は明治10年から15年の間である⁶²⁾。すなわち、相撲協会が独自に許したもので、明治15年に吉田司家の追認を受けたものである。しかし、緋房や草履の免許年月が御請書とかなり違っているので、御請書を間違って書き写した可能性も否定できない。これは今後の検討課題として残しておきたい。

この木村誠道は16代木村庄之助を襲名しているが、『相撲新書』(上司著, pp.88-89)や『読売新聞』(M30.12.26)によれば、その襲名は明治30年12月である。『東京日日新聞』(M45.1.15)に正式な免許状の写しがあり、日付は明治31年4月11日となっている。多くの文献では「紫房」として記述されているが、免許状の文面では「紫白」である。正式な免許状に「紫白」と書いてあるのだから、「紫」ではない。ただ当時は、2, 3本の白糸を交ぜた紫房を「紫白」とか「紫房」と呼んでいたようだ。当時は、白糸の混ざらない「純粹の紫房」は授与されていなかったのもので、「紫房」と呼んでも誤解されることもなかった⁶³⁾。

(7) 木村庄治郎

これは3代木村庄治郎(慶応2～M19.5)で、明治19年8月に死亡して

いる。番付では明治18年4月、最上段に記載されている。御請書では「方屋上草履」となっているので、明治10年以前に緋房免許を吉田司家から授与されていた可能性が高い。草履は明治10年から15年の間で相撲協会から独自にその使用許可を受けていたようだ。その使用許可を御請書で再確認したことになる。緋房にしろ草履にしろ、その授与年月を確認できる資料はまだ見つかっていない。いずれにしても緋房の免許年月と草履の免許年月は違っていたらしい。というのは、御請書では、緋房のことは記載していないからである。

明治17年の天覧相撲を描いた錦絵では、木村庄治郎は緋房で描かれているので、その2年前にはすでに緋房だった可能性が高い。緋房だったから、相撲協会は「方屋上草履」を申請しているはずだ。しかし、草履の使用を確認できるのは、今のところ、御請書だけである。明治17年の天覧相撲の錦絵でも、草履を履いていたかどうかは確認できない。

以上、6名の行司が緋房以上である。式守与太夫を除き、すべて草履の使用が追認されている。明治10年から15年までに相撲協会が独自に出した緋房や草履の使用許可をすべて、御請書を見る限り、吉田司家はそのまま追認している。

8. おわりに

本稿では、寛政以前にも草履に特権があるかどうかを調べ、そのような特権はなかったことを指摘した。さらに、木村庄之助や木村庄之助がいつ頃から草履を許されているかを文献で調べ、木村庄之助は天明8年以降、式守伊之助は文政11年以降であることを指摘した。寛政の上覧相撲で木村庄之助が草履を履いているかどうかを調べ、文字資料では断言できないが、錦絵では履いていることを確認した。

明治以降の行司に関しては、御請書に記載されている緋房以上の行司を取り上げ、その緋房と草履の年月を調べた。そして、緋房の年月と草履の年月にはズレがあることを指摘した。しかし、これは昭和35年1月まで同じである。

本稿で取り上げなかった明治初期の緋房以上の行司について、ここで二人だけ取り上げておきたい。

- (1) 13代木村庄之助（嘉永6.11～M9.4）

改名：小太郎→幸太郎→市之助→3代多司馬（嘉永1.11～嘉永6.2）

- (2) 6代式守伊之助（嘉永6.11～M13.5）

2代式守鬼一郎（天保6.10～嘉永6.2）

この行司は二人とも現在の立行司に相当しているので、間違いなく緋房や草履の免許を受けていたはずだ。錦絵では房の色や草履を確認できるが、いつの時点でその免許が出たのかはわからない。錦絵では幕末にすでに草履を履いている。しかし、残念なことに、免許が出た年月を確認できる文字資料を私は持ち合わせていない。

明治15年に吉田司家と相撲協会との間で取り交わされた契約書をみると、当時すでに「紫白」、「緋」、「紅白」があるので、明治の初期にはこれらの色の存在を確認できる。緋房は江戸時代からその存在を確認できるが、「紅白」やその下位の色となると、必ずしも明白ではない。江戸時代、「紅白」の下位行司が何色だったのかさえはっきりしない。「黒」だったと推測しているが、それを確認できる資料を持ち合わせていない。また、「青」がいつ頃から使われ出したかもはっきりしない。

明治40年代以降の緋房と草履の免許については、それを記した資料も比較的容易に得られる。それについては、別の拙稿で扱っている。

最後に一言。協会が吉田家に出した御請書が公的になったのは、昭和34年出版の荒木著『相撲道と吉田司家』が最初である。それまで、御請書の

中身についてはまったく知られていない。そういうことで、明治10年から明治15年のあいだ、行司の世界でどういうことが起きていたかはまったくわかっていない。番付は残っているのでそれから判断できるものも多いが、房の色や草履授与の年月は番付だけではわからない。

吉田司家の主が西南の役に参加していた間、東京の相撲界の人事は吉田家の管轄下にはなかった。その人事の動きが御請書に記されていると私は解釈している。しかし、御請書に述べてあることは全面的に正しいわけでもないようだ。特に木村瀬平と木村誠道の房の色や草履免許に関し、御請書と異なる年月がありすぎる。なぜそのような違いがあるかはっきりしないが、もっと注意深く調べれば、どれが正しいか判明するはずだ。これは今後の課題としておきたい。

【追記】

本稿の再校段階で、つい最近（2007／1／12）、『木村瀬平』（根岸治左衛門著、明治31年）をやっと入手した。それによると、明治17年の天覧相撲を機に、木村瀬平は吉田家より正式に緋房を授与されている。それ以前に緋房を使用していなかったかどうかは不明である。御請書が正しいとすれば、明治17年以前の緋房は協会が独自に許可していたことになる。木村瀬平が明治15年に既に緋房を使用していなかったとすれば、御請書の転写ミスである。明治15年の日付がある御請書は架空の文書ではないはずだからである。なお、予断になるが、小冊子『木村瀬平』はこの世にほんの数冊、おそらく1、2冊しかないのかもしれない。その存在は『江戸時代大相撲』（古河著）にも記述されている。

注

- 1) 本稿をまとめるに際しては、両国の相撲博物館に所蔵している錦絵、書籍、雑誌等でお世話になった。また、29代木村庄之助には特に昭和30年以前の行司につ

いてご教示を頂いた。ここに、改めて感謝の意を表する。

- 2) 緋房時代によって紅房、朱房、赤房などと呼ばれている。どの呼び方でも特別に問題はないので、本稿では緋房を用いることが多いが、ときには赤房や紅房を使うこともある。特に明治前期は「房」の代わりに「総」が用いられているが、中期以降は「房」がよく使われている。なお、行司規定の改訂は、実際は、昭和30年5月以前、たとえば昭和26年頃にも行なわれているはずだが、本稿では昭和35年1月の規定を主として参考にした。ちなみに、昭和26年1月には新しく副立行司が設けられているし、昭和22年6月には三役格行司のうち二名（庄三郎と正直）に特別に草履を許している。三役全員が草履を履けるようになったのは昭和35年1月である。
- 3) この御請書は荒木著「相撲道と吉田司家」（昭和34年）に簡単に紹介されている。残念なことに、その資料の基になるオリジナルの文書はまだ見えていない。相撲博物館にもその資料はない。
- 4) 荒木著『相撲道と吉田司家』（pp.116-129）によると、吉田善左衛門（追風）は西南の役のため明治10年頃から15年頃まで司家としての活動はしていない。吉田追風が活躍しだすのは、明治15年5月頃からである。横綱境川は熊本で横綱を受けているので、明治10年2月頃までは活躍していることになる。したがって、明治10年頃から15年5月頃までの間は行司の免許などは出ていない。『ちから草』（129）によると、吉田善左衛門は明治10年2月、西南の役勃発と同時に熊本隊に加わっている。
- 5) 元禄12年には円形土俵で勸進図相撲は興行しているので、この四角土俵はそれ以前のもを描いているようだ。が、その制作年代は、今のところ、必ずしも明確でない。さらに、この図は南部相撲を描いたものとよく言われるが、土俵が四角というだけでは必ずしも南部相撲だとは言えない。元禄の頃、南部相撲が江戸で興行したことを示す資料もない。この四角土俵の絵図が南部相撲を描いたものだ断定するには、まだ確かな根拠がない。これに関しては、改めて検討したい。
- 6) 吉田追風の由緒を扱っている文献ではそのことが記されている。文献によると、草履はもともと、朝廷から許された履きものだったらしい。しかし、それを証明する資料は、吉田司家家伝の資料しかない。
- 7) 行司はどの行司名でも、その代数と任期は『大相撲人物大事典』（『相撲』編集部、2001）の「行司の代々」（pp.285-706）に基づいている。
- 8) この『相撲行司家伝』は歴代の木村庄之助を扱っている書籍で頻繁に見ることができる。たとえば、酒井著『日本相撲史（上）』（昭和31年）もその一つである。
- 9) 天明年間には谷風と小野川の取組を描いた錦絵に木村庄之助もときどき描かれているが、やはり草履を履いていない。正徳の頃は草履を軽視している写本があ

るのに、後の時代には草履が特権的な着用具になっている。寛延2年以前も草履は特権的着用具ではなかったはずである。草履に特権を与えるようになったのは吉田追風の影響かもしれない。その辺のことは、実は、わからない。

- 10) 文政10年に9代木村庄之助が書いた『相撲行司家伝』は、草履だけでなく、南部相撲の記述に関しても不正確である。つまり、南部相撲が吉田司家の支配下にあったという記述である。南部相撲は少なくとも吉田家の支配下にあったのではなく、別の家元だったに違いない。しかし、これは本稿の「草履」とは関係ないので、これ以上触れない。
- 11) 寛政3年以降であれば、木村庄之助は勸進相撲はもちろん、上覧相撲でも草履を履いている。本稿の関心事は、寛政3年の上覧相撲で木村庄之助が草履を履いていたかどうかである。
- 12) 追風が草履を履いているのは、徳川家斉公上覧相撲絵巻（堺市編『相撲の歴史』、p.39）や『日本相撲史』（酒井著、p.39）の絵図でも確認できる。勝ち力士の谷風に弓を授けている行司は文字資料から追風だとわかるが、その行司は草履を履いた姿で描かれている。
- 13) この『相撲隠雲解』は上覧相撲を扱っている本ではかなり言及されているが、その一つにVANVAN 相撲界（秋季号、昭和58年10月）がある。現代風に読みやすくしてある。
- 14) 錦絵の年号は描かれている取組、番付、力士等を総合的に判断するが、ときどき、年号にズレが生じることもある。錦絵の年号は記されている出典に基づいている。
- 15) この錦絵が寛政2年11月場所の取組かどうかに関しては、『相撲錦絵発見記』に基づいている。
- 16) 『相撲浮世絵』（p.70）、『日本相撲史（上）』（酒井著、p.173）、『大相撲ものしり帖』（池田著、276）などに雷電と陣幕の取組を描いた錦絵があるが、木村庄之助は草履を履いているように見える。池田氏も書いてあるように、この錦絵は実際の上覧相撲の土俵そのものではなく、勸進相撲の本場所の土俵から想像して描いている。木村庄之助は草履を履いて描かれているが、上覧相撲では履いていなかった可能性もある。
- 17) 寛政の頃は、木村庄之助が最高位である。次席の式守伊之助とは、草履に関するかぎり、厳然とした差があった。木村庄之助は草履を履くことができたかもしれないが、式守伊之助は当時、草履を許されていない。木村庄之助は天明8年に草履を許されているが、式守伊之助はまだ許されていない。
- 18) この行司は木村庄之助や式守伊之助ではなく、地位の低い別の行司の可能性もある。その場合は、草履はまったく問題にならない。当時、横綱を土俵まで先導

- する行司は木村庄之助や式守伊之助でなくてもよかったかもしれないが、本稿では、現在と同様に、木村庄之助や式守伊之助が土俵までも横綱土俵入も先導したという解釈をしている。
- 19) もしそのような資料があったなら、それをどこかに公表して欲しい。明治時代の講談本には木村庄之助が草履を履いていたという記述があるが、確実な資料としては採用できない。それを裏付ける資料がないからである。
 - 20) 上覧相撲の様子を絵師が実際に見た可能性は低いので、錦絵が真実を伝えているかどうかに関してはまったく疑問がないわけではない。勧進相撲で草履を履けたので、上覧相撲でも履けたと勘違いしているかもしれない。しかし、他の錦絵などから判断する限り、錦絵は真実に近い場合が多い。
 - 21) 寛政から幕末まで上覧相撲は7回行われているが、吉田追風は完成3年6月と6年3月に取組を裁いている。
 - 22) 式守伊之助は安永以降、基本的には、木村庄之助の次席行司名となっている。実際は、特に明治時代に見られるが、席順が入れ替わったときもある。
 - 23) 寛政3年6月の上覧相撲が行われた頃、木村庄之助は式守伊之助より優位で、木村庄之助は草履が履けたのに、式守伊之助は履けなかった。式守伊之助が草履免許の申請をしたという文献も見ることがない。
 - 24) 現在と違い、土俵際まで横綱を引く行司は最高位の行司でなかった可能性もある。その辺のことは、私にはわからない。
 - 25) 2代式守伊之助は初代式守与太夫で、初代式守伊之助の引退後は木村庄之助の次席だった。寛政11年11月以降、式守伊之助が途絶えたのは、伊勢ノ海部屋の継承問題がこじれたためである。寛政12年から文化11年春まで、錦絵に式守伊之助が描かれていないのは、式守伊之助がいないからである。その間は、式守与太夫が式守家の最高位である。
 - 26) 2代式守伊之助がどんな履物を履いていたかは、文字資料では確認できなかった。錦絵は存在しているはずなので、それを丹念に調べれば確認できるかもしれない。
 - 27) 紫色が江戸時代、「禁色」だったことは、たとえば、古河著『江戸時代大相撲』（pp. 296-7）にあるように、相撲の本ではしばしば言及されている。
 - 28) 後で触れるが、御請書によれば14代木村庄之助に紫紐が許されているので、15代木村庄之助は二番目ということになる。
 - 29) 正徳年間の『相撲家伝鈔』に大阪行司の吉片兵庫が紫房の軍配を用いたことが記されているが、この「紫」は吉田司家から授与されたものではない。その紫は、おそらく、純粹の「総紫」であろう。
 - 30) 寛政以降、幕末まで、「紫房」を許された行司は、おそらく、9代木村庄之助だ

けかもしれない。さらに、御請書の記載が真実なら、明治初期に、14代木村庄之助に「紫房」の使用が許されている。明治時代、「紫房」を最初に使用したのは15代木村庄之助ではなく、14代木村庄之助である。しかも、それは明治10年代である。

- 31) 文書の宛て先は相撲協会ではなく、当時の相撲会所の代表者たちになっている。しかし、事実上、相撲協会と吉田司家との間の契約書とみなしてよいものである。
- 32) 「故実相伝」の項目は「力士伝」と「故例式」だが、本稿とは直接関係ないので省略する。
- 33) 興味深いことに、明治15年にはすでに「紫白」も認められている。しかし、白糸が交じらない「総紫」はまだ認められていない。幕末にも『相撲金剛伝』（文政10年）にあるように、木村庄之助に「紫」を許しているが、それは「紫白」だった可能性が高い。いずれにしても、吉田司家も相撲協会も「紫白」については同意している。
- 34) 「横綱」と「持太刀」は、もちろん、力士に関係するものである。
- 35) 明治10年から15年まで、吉田司家関わっている行司や横綱の免許状が皆無だが、それは、その間、吉田善左衛門が西南の役のため行司司家としての役割を果たせなかったからである。
- 36) このことは『相撲道と吉田司家』（荒木著、pp.116-126）や『本朝相撲之司吉田家』（肥後相撲協会、pp.21-22）にも述べてある。このような契約があることから、明治15年7月付けの「御請書」の存在も間違いない。
- 37) 木村庄之助、式守伊之助、木村庄三郎の位置が一行ずつズレている感じがするが、荒木著『相撲道と吉田司』のとおりに記すことにした。オリジナルを転記した別の資料があれば、記載ミスかどうかはわかるが、そのような資料を見たことがない。
- 38) 木村庄三郎の「右同」がどれを指すかはっきりしないが、少なくとも「紅紐」は含まれていると解釈する。たとえ「鬘斗目」と「麻上下」を含んでいたとしても、それは本稿の関心事とは特に関わりない。
- 39) 御請書では「庄次郎」となっているが、「正誤表」があり、その中で「庄治郎」が正しいと指摘してある。明治15年の番付や明治16年の絵番付でも確かに「庄治郎」となっている。
- 40) 明治15年頃の行司の位階を現在の位階に置き換えるのは必ずしも妥当ではない。位階の呼び方も違っているし、位階の区切り方もまったく同じとは言えないからである。明治15年頃は力士の「十両」は「幕下二段目」と言われていた。
- 41) 相撲協会が出した使用許可に対し、明治15年以降、吉田司家が改めて正式に免許状を出したかどうかはわからない。単に追認した可能性が高いが、木村誠道に

は明治28年免許状を出したということが『読売新聞』(M29.2.24)や『角力新報』にあるので、例外があったかもしれない。

- 42) 御請書に「紫白」となっているが、これは純粹に「紫白」である。しかし、相撲の文献ではこの「紫白」を「紫」として捉えている場合が多い。純粹な「総紫」の授与は明治末期になってからであろう。
- 43) 明治15年の御請書が明治中期に明らかになっていたなら、「紫白」房が14代木村庄之助に授与されたことはずっと以前にわかったかもしれない。私の知る限り、御請書の存在は荒木著『相撲道と吉田司家』(昭和34年)が最初である。
- 44) 行司の免許状は、ときどき、場所中でも出されている。申請はそれ以前に出されているはずだが、その許可が正式に下りたのがたまたま場所中だったに違いない。まだはっきりしないのは、行司は場所中に房を取り替えたのかということである。実際は、場所前に口頭で場所中に許可の授与が伝達されていたかもしれない。いずれにしても、正式の免許状の日付は場所中である。
- 45) 番付発行の後、行司が死亡すれば、そのまま記載されることになる。このような番付記載を死跡と呼んでいる。ときどき、番付には死跡がある。
- 46) 明治17年の天覧相撲はあまりにも有名な相撲なので、それを描いた錦絵は相撲の歴史を扱った本ではほとんど見ることができる。しかし、実際の相撲場を忠実に描いているのかどうかに関しては、首を傾げたくなるものが意外と多い。
- 47) 草履には「上草履」と「通い草履」の二つがある。土俵で履く草履が「上草履」で、花道で履く草履が「通い草履」である。以前、その「上草履」に種類があったのかどうかははっきりしない。つまり、位階によって草履の呼び名が変わっていたのかどうかははっきりしない。明治期の文献ではときどき「福草履」が使われている。緋房行司の中で草履を許されたものを「福草履」と呼んでいるような感じがするが、それが正しい解釈なのかどうかははっきりしないので、参考のために指摘しておきたい。本稿で「草履」と呼んでいるのは、土俵ではなく「上草履」のことなので、「福草履」もその一つである。ちなみに、昭和20年代に「格草履」が使われているが、これは三役の中で草履を履ける行司のことを指している。
- 48) 式守与太夫は明治15年夏の番付では庄三郎と庄五郎の間にあるので、庄五郎に草履が許されていれば、与太夫にも当然許されているはずだが、なぜか「紅紐」だけの記載になっている。記載ミスかもしれないし、与太夫に何らかの事情があって昇格が遅れていたかもしれない。なぜ与太夫が庄五郎に遅れて「紅紐」になっているか、確認できる資料を持ち合わせていない。
- 49) 『角力新報』(明治30年3月号, p.50)では興行7日目から紫房を使用したとなっているが、正式な免許が遅れたかもしれない。いずれにしても、明治29年から30年にかけて8代式守伊之助にも紫房が授与されている。

- 50) 明治8年4月の改印がある錦絵では、木村庄五郎は緋房の軍配を持って柄ノ平と上ヶ汐の取組を裁いている。これが真実を描いているのであれば、明治8年には既に緋房だったことになる。
- 51) 『角力新報』（第8号、明治31年8月号、p.57）によると、明治17年の天覧相撲を機に緋房を許されている。また、月刊誌『相撲』（平成9年1月号、p.103）によると、木村瀬平は天覧相撲の後、吉田司家から緋房免許が授与されたという。多くの文献では、前者を採用している。緋房が明治17年に許されているとすれば、それは御請書と一致しない。本稿では、御請書を正しいものとして採用しているが、御請書を全面的に認めているわけではない。特に庄五郎（木村瀬平）と誠道の年月は他の文献と大きく違っている。これに関しては、別の稿で詳しく取り上げる。
- 52) 明治期の番付で、特に最上段と二段目の行司がどういう基準で記載されているかはっきりしない。現在のように、位階順にひとまとめに記載してあれば、番付から房の色や草履なども判断できるのだが、明治期の番付は必ずしもそのような基準でもなさそうだ。
- 53) 木村庄五郎は木村瀬平になってから、いろいろと話題の多い行司だし、その行司歴もかなり変わっているので、最初の草履免許がいつなのかを述べた文献が見つかる可能性は大いにある。しかし、私は見つけることができなかった。そのような資料を誰か見つけたなら、どこかに公表して欲しい。
- 54) 『読売新聞』（M29.2.13/24）にも木村瀬平の行司歴について簡単な記事がある。
- 55) 『読売新聞』（M29.2.13）によると、草履を剥奪されたのは明治27年である。行司は辞めたが、年寄木村瀬平になっている。行司を辞めたときであれば明治26年のはずだが、どういうわけか明治27年となっている。
- 56) 月刊誌『相撲』（平成9年1月号、p.103）には明治32年3月14日、木村瀬平に紫房の免許が吉田家より授与されたとなっている。
- 57) 小島氏がどの出典に基づいてそのような判断をしたかは定かでない。もしかすると、番付を参照したかもしれない。『相撲新書』（上司編、明治32年、pp.88-89）にも明治31年、木村誠道に「紫」が授与されたとあるが、木村瀬平の「紫」については何も記されていない。
- 58) 木村誠道から式守鬼一郎、それから式守鬼一郎から再び木村誠道にそれぞれ改名した経緯は、多くの文献で述べてある。木村姓から式守姓になったのはこの木村誠道が初めてだが、式守姓から木村姓になったのもやはりこの木村誠道が初めてである。当時は木村家と式守家は別系統だったので、所属する「家」を変えたらその家の姓を名乗らなければならなかった。
- 59) 本稿では御請書が正しいものとして論を進めているが、御請書を正しく書き写

していない可能性もある。というのは、草履免許にしては行司としての経験が少なすぎるからである。

- 60) 『読売新聞』(M29.2.24/5.24)にも木村誠道が28年、九州巡業中に熊本の吉田追風から草履の免許を授与されたとする記事がある。『都新聞』(M43.4.29)では29年に許されたとある。御請書以外の文献では28年か29年に授与されたとなっているし、しかもこれらの記事は、多くの場合、16代庄之助が生存中に書かれているので、記述が間違っているとも思われない。木村誠道の場合、御請書から書き写したとき、項目の箇所を間違った可能性がある。
- 61) 月刊誌『相撲』(平成9年1月号, p.103)では木村誠道は草履免許を明治29年6月に授与されている。そのとき、木村瀬平にも草履免許が授与されたという。どの資料に基づいて、草履免許の授与を明治29年だとしているのかわからないので、参考までに、異なる年月がもう一つあることを記しておきたい。
- 62) 木村誠道は明治6年から明治11年までは高砂の改姓組と同道しているので、その間、吉田司家から緋房免許や草履免許を授与されていない。東京相撲を脱退したときは、幕下行司だったようだ。明治11年に復帰したが、明治12年1月の番付では二段目に乗っている。
- 63) 純粹の「総紫房」をいつ頃から授与するようになったかは、必ずしもはっきりしない。明治43年、立行司は「紫」だが、それが総紫だったのかどうかははっきりしないのである。式守伊之助を立行司として格付けしたとき、木村庄之助と区別するため、総紫を導入したかもしれない。その辺はもう少し調べてみる必要がある。昭和時代、副立行司があったころは、式守伊之助の紫白と区別するため、白と紫の割合に差があった。同じようなことが、明治時代にもあったのかどうか、はっきりしない。私はまだ、資料で確認したことがない。

参考文献

- (ここに記載した以外にも、相撲関係の雑誌、錦絵、絵葉書、写真などを参考にした。)
- 荒木精之、昭和34年(1959)、『相撲道と吉田司家』、相撲司会。
- 池田雅雄(編)、昭和45年(1970)、『相撲百年の歴史』、講談社。
- 池田雅雄、1990、『大相撲ものしり帖』、ベースボール・マガジン社。
- 『江戸相撲錦絵』(『VANVAN 相撲界』(1986新春号))、ベースボール・マガジン社。
- 金指基、2002、『相撲大事典』、現代書館。
- 上司子介編(上司延貴著)、明治32年(1899)、『相撲新書』、博文館。
- 木村喜平次、1714(正徳4年)、『相撲家伝鈔』(写本)。
- 木村政勝、1763(宝暦13年)、『古今相撲大全』(写本)／木村清九郎(編)、1984(明治17年)、『今古実録相撲大全』。

- 小島貞二，昭和54年（1979），『大相撲人物史』，千人社。
- 酒井忠正，昭和31年（1956）／39年（1964），『日本相撲史（上・中）』，ベースボール・マガジン社。
- 堺市博物館（制作），1998年3月，『相撲の歴史一堺・相撲展記念図録―』，境・相撲展実行委員会。
- 式守蝸牛，1793（寛政5年），『相撲隠雲解』（写本）／『VANVAN 相撲界』（秋期号）に収録，1983。
- ジョージ石黒，1996，『相撲錦絵発見記』，中日新聞本社。
- 『相撲浮世絵』（別冊相撲夏季号），昭和56年（1986）6月，ベースボール・マガジン社。
- 『相撲』編集部，2001，『大相撲人物大事典』，ベースボール・マガジン社。
- バ谷太一（編），昭和52年（1977），『大相撲』，学習研究社。
- 根間弘海，1998，『ここまで知って大相撲通』，グラフ社。
- 根間弘海，2005，「軍配房の色」『専修経営学論集』第81号，pp.149-79。
- 根間弘海，2006，「南部相撲の四角土俵と丸土俵」『専修経営学論集』第82号，pp.131-62。
- 根間弘海，2006，『大相撲と歩んだ行司人生51年』，33代木村庄之助と共著，英宝社。
- 根間弘海，2006，「譲り団扇」『専修大学人文科学所月報』第223号，pp.39-65。
- 根間弘海，2006，「土俵の揚巻」『専修経営学論集』第83号，pp.217-49。
- 肥後相撲協会（著作兼発行者），大正2年，『本朝相撲之司吉田家』。
- 藤島秀光著，昭和16年（1941），『力士時代の思い出』，国民体力協会。
- 松本平吉（編集権出版人），明治17年（1884），『角觥秘事解』。
- 三木愛花，昭和3年（1928），『江戸時代之角力』，近世日本文化史研究会。
- 三木愛花，明治34年（1901），『相撲史伝』，曙光社。
- 三木貞一・山田伊之助（編述），明治35年（1902），『相撲大観』，博文館。
- 山田伊之助（編），明治34年（1901），『相撲大全』，服部書店。
- 横山健堂，昭和17年（1942）『日本相撲史』，富山房。
- 吉田追風，昭和42年（1967），『ちから草』，吉田司家。この中に，「すまい御覧の記」，『吹上御庭相撲上覧記』，『相撲上覧記』，『相撲私記』などの抜粋がある。
- Bickford, Lawrence, 1994, *Sumo and the Woodblock Print Masters*, Tokyo: Kodansha International.